



関西大学学術リポジトリ

Kansai University Institutional Repository

Title	中国古代天文学思想の研究 - 張衡を中心として - [全文の要約]
Author(s)	前原, あやの
grantor	関西大学
Issue Date	2014-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/9023
Rights	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

2013 年度博士論文 要旨

関西大学大学院 文学研究科 総合人文学専攻
博士課程後期課程 10D2024 前原あやの

中国古代天文学思想の研究—張衡を中心として—

本博士論文は、後漢の天文学者である張衡（七八～一三九）の思想を中心として、中国古代における宇宙論、星座の知識について取り上げ、宇宙論の一つである渾天説の思想的背景、星座分類の展開について明らかにすることを目的とする。本論文は二部と補章の九章の構成であり、これに序章と終章、附録を加えた。

第一部「張衡と渾天説」では、中国の宇宙構造論の一つである渾天説と、渾天説を主張する代表的人物である張衡について、四章に分けて論じた。

第一章「『渾』の用法に見る渾天説の原義」では、「渾」の字が漢代までにどのような意味で用いられるかを整理し、なぜ渾天説に「渾」の字が用いられたかの理由を探った。後漢までの「渾」の用例から、「渾」の字が用いられた渾天説の原義として、①水の流れに繋がる動的なイメージが付与され、窮まりなくめぐる天の運行を表現した、②原初的、一なるものとしての未分化な状態を表現したという二つの理由を提示し、渾天説が時間的・空間的な次元を含む、天地一体の世界を最大の特徴としていたと結論づけた。現在渾天説の特徴と考えられている球状の天は、張衡が具体的に打ち出したものと考えられる。

第二章「『靈憲』と『渾天儀』の比較」では、張衡の著作か否かで見解の分かれる『渾天儀』の著者について検討した。また同時に、張衡の天文学関係の著作とされる『靈憲』と『渾天儀』の、後世の受容について比較した。前者の問題について、従来は『渾天儀』を張衡の著作とする説が有力であったが、佚文の引用箇所と引用の際の書名とをあわせ比較した結果、『渾天儀』は張衡が著わした部分と、張衡の意思を受け継ぐ後学の手になる部分とに分けられることを明らかにした。後者の問題については、後世の両書の扱いの相違は成書目的の違いから来ると判断した。『靈憲』は第一章で述べた渾天説の特徴である、時間的・空間的な次元を含む内容であるのに対し、『渾天儀』は天文観測儀の渾天儀の構造、使用法が中心の内容であった。これらの違いが、後世の扱いの差を生んだと考えられる。

第三章「渾天説の天文理論」では、まず張衡の渾天説において地は球状ととらえられていたのかという、特に『渾天儀』の内容に関わる問題を検討した。地の見解に関わる記述は、第二章で張衡以外の人物によって書かれたと判断した部分であり、その内容も明確に球状と主張しているわけではないため、張衡は球状の地の概念を持っていなかったと結論づけることができる。次に、『靈憲』の天文理論と他の思想的文献の内容の継承・発展の関係について考察した。その結果、『靈憲』が『周髀算経』や『淮南子』などの内容を継承していること、その一方で、張衡は先行の知識を継承した上で実際に天体を観察し、「魄」や

「両儀」など自身の言葉でそれらを独自に表現していたことを明らかにした。

第四章「渾天説と尚水思想」では、諸子文献、特に道家系文献の記述にある水に関する記述を整理し、『靈憲』の記述と比較することで、渾天説の思想的背景に水を尚ぶ尚水思想の流れがあることを明らかにした。中でも、天地水を並列する『靈憲』の記述方法は他の文献と異なり、のちの五斗米道の三官信仰に通じる考え方であるが、その思想的基盤が五斗米道成立以前にすでに存在していたことを『靈憲』の記述から確認した。三官信仰と宇宙構造論を結びつける見方は今後、天文学思想を考える上で重要な視点であると考えられる。

第二部「中国の星座観をめぐって」では、中国における星座分類の変遷をもとに、張衡の星座の知識について、また『靈憲』で言及される「海人之占」について、四章に分けて論じた。

第一章「中国の星座分類の変遷」では、天文類書や正史の天文志の星座配列から、分類に複数のバリエーションがあること、しかし主に天の北極を中心とする中宮・三垣分類と、三人の人物によって名づけられた星座を整理した三家分類の、二つの大きな流れがあることを明らかにした。そして、分類の多様化の要因を検討した。これまでは時代ごとの分類の変化という一側面のみ言及されてきたが、星座分類の変遷を精査すると、時代による変化だけでは一概に説明しきれないことは明らかである。本章では分類の変化の主な要因として、①成書目的の相違、②インドや他国から天文学が伝わったこと、③依拠する宇宙構造論の相違、の三点を挙げた。特に①について、中宮・三垣の分類が正史の天文志を中心に確認できるのに対し、占星術のために成書された天文類書は、二十八宿を主とするもの、三家分類の双方が確認できるという事実を指摘した。天文書の成書目的によって分類が異なるという見方はこれまでなされておらず、今後の天文学研究の上でも重要な指摘であると考えられる。

第二章「詩・賦に見える星座の配列」では、第一章の検討を踏まえ、星座についてうたわれた詩賦の星座配列を確認した。そして、天文書では『史記』『漢書』以降見られなくなった五宮の分類が「観象賦」や「渾天賦」などの詩賦によみこまれており、唐代まで用いられていたことを明らかにした。また、「歩天歌」や「玄象詩」はそれぞれ異なる順序のテキストがあり、同じ詩賦でも星座の配列が改変される例があること、その時々には人々が利用しやすいよう順序が入れ替えられていたことも明らかとなった。「玄象詩」は敦煌から二種のテキストが発見されているが、一方のテキストは完全ではない。本章では欠けている前半部分の星座配列を推測し、配列がどのような星座分類にもとづくのかを考察した。

第三章「張衡の星座の知識をめぐって」では、張衡の著作に見える星座の記述から、漢代に星座がどのように分類されたのかを検討した。また、『通志』天文略などに引用される張衡のものとする星座に関する佚文が、実際に張衡のものなのかについて考察を加えた。張衡の佚文は、実際には張衡のものではなく、「天文大象賦」（張衡の作とされることがある）の注と重なる記述であることから、張衡の言と見なされたのであろう。一方、張衡の記述であることが確かな『靈憲』と「思玄賦」からは、張衡が紫宮と太微に主眼を置き、中央と四方の五宮分類を踏まえていたことを明らかにした。

第四章「『海中占』関連文献に関する基礎的考察」では、『靈憲』の星座に関する記述の中にある「海人之占」と関わりとされる『海中占』について、基礎的な考察を行なった。『海中占』はこれまで、南方で書かれた天文書であるとか、航海に関わる天文書であるなどの見解があったが、佚文を網羅的に整理・検証したところ、中国内部で書かれ、蓬萊をはじめとする三神山と関わる文献であることが明らかとなった。つまり『海中占』は、三神山の伝承が伝わる燕・斉の方士が作成した天文書だったと考えられるのである。さらに本論文には、『海中占』の佚文を輯集、整理し約八三〇条を附した。

補章「張衡と占術」において、張衡の占術に関する記述、讖緯思想に対する見解を整理した。張衡は讖緯思想を否定した人物として知られるが、実際に記述を確認すると、張衡は讖緯思想の、恣意的な解釈によって本来の占術を歪めたり、曲解したりすることを否定しているのであって、讖緯思想そのものを否定しているわけではないという事実が見えてくる。張衡が著わした『靈憲』や「思玄賦」には、易占や亀卜、占夢、帰蔵（易に類似する占い）の記述がある。また「請禁絶凶讖疏」では、律曆やト筮、卦候、九宮、風角などの占いを容認する。これらに共通する曆や星、数に関わるという点を張衡は正統ととらえて重視し、将来を見定める際に重要なものであると考えていた。

張衡の天文学および天文学思想は、中国古代天文学のきわめて重要な部分を構成している。本論文ではその張衡を中心に、宇宙構造論としての渾天説の歴史的検討、文献的精査にもとづく『渾天儀』の作者の解明、『靈憲』の思想的検討にもとづく尚水思想の具体的把握、詩賦を含めた星座分類の詳細な整理による変遷過程の検討、張衡の星座観の検証、『海中占』の考察など、従来未解決だった問題、あるいは十分論じられてこなかった事項をできるだけ実証的にとり上げ、一定の結論を導き出すことができた。とりわけ、天文書の成書目的の相違によって後世の扱いや星座の分類に相違があること、渾天説を含めた宇宙論の思想的背景に尚水思想があり、道家系文献との関係がうかがえること、そして詩賦も含めた天文書の星座分類の実態が明らかとなったことは大きな成果であろう。これらの成果は、今後の天文学・天文学思想の研究において重要な意味をもつものと思われる。